三島由紀夫『愛の渇き』の生成

――悦子の「幸福」をめぐって――

田中裕也

一　問題の所在

三島由紀夫『愛の渇き』は長篇書き下ろし小説として、新潮社から昭和二十五年六月三十日に上梓された。昭和二十年代の三島の長篇小説は構成の乱れを指摘されることが多く、作品としての成否の意見も分かれることが多い。しかし『愛の渇き』は発表当時から評価が高い。花田清輝は本作のヒロインである悦子の「生きることも、死ぬこともできない現実」への「絶望」の姿を描いたとし、こうした難解な題材に三島が「真正面から取組みながら、悠々と描写の筆を進めてゆく」[1]ことを評価している。さらに昭和二十五年末の「読売新聞」上の小説「ベスト・スリー」[2]にも選ばれている。好意的な評価で迎えられた『愛の渇き』だが、吉田健一が「他のものに見られない完成と充実がある。それ故に却って、比較的に取り上げられない結果になった」[3]というように、三島の長編小説では比較的言及されることの少ない作品である。

その点に不安を抱いたのかは不明だが、三島は積極的に『愛の渇き』の自作解説を施す。雑誌「群像」での「創作合評」では、三島は中村光夫、本多秋五とともに自作の問題の背景を説明する。本多は悦子について「性的不満から来るヒステリー女に託して、作者の持つているある不満とか、ある渇きとかつまり「愛の渇き」ですね、そういうものをうつたえようとしている作品だと思う」と言い、中村も「悦子という女が三島君の一種のイデーだと思う」と言

う。二人に応答するかたちで三島は「中村さんが言つてくだすつたイデーということで、僕の場合にはイデーということがヒステリーの中に読めなければ、それは僕の失敗なんです」[4]と述べている。

またこの合評から三年後に『三島由紀夫作品集』第二巻（昭28・8・31、新潮社）に『愛の渇き』が収録された。その際に三島は「解説」で悦子の「狂騒のディテールは、フロイトの「ヒステリイ研究」に負ふところが大であつた」[5]と述べている。この三島の発言をどこまで信頼するかは別としても、三島はここで『愛の渇き』のテーマ理解には、フロイトをとおして悦子の内面の理解が重要であることを明らかにしたと言ってよい。三島は同「解説」でさらなる種明かしをする。

三島は『愛の渇き』には「当時一時的に心酔してゐたモオリヤックの小説の影響があつた」ことを明らかにし、「最初は黙示録の大淫婦の章からとつて、折角「緋色の獣」といふ題をつけたのが、それでは弱すぎるといふ新潮社の意見で、「愛の渇き」と改題したために、モオリヤックくさくなつた」と言う。また悦子が自身の境遇に対して「救済を欲しなかつた」のに、自らの「幸福」を頑なに主張する姿勢について、三島は「この主題は、反ボヴァリイ夫人的、反テレエズ・デケイルウ的といふことができよう」と言い、それは「「神なき人間の幸福」といふ奇怪な観念」[6]だとする。

ここまでくると読者への小説読解のためのサービスどころか、三島が作品読解に縛りを与えている感さえある。しかし三島の発言を受け、『愛の渇き』研究は悦子の「反テレエズ・デケイルウ的」なあり方と、その「幸福」の意味をめぐって論じられてきた。

柴田勝二は『愛の渇き』の文体について、「傾斜をはらんだ女主人公の輪郭を提示するために、三島はモーリヤックの翻訳の文体への接近を試みたと考えられる。特徴的なのはそれによって、自由間接話法の比重が高い文体がもたらされている」[7]とした上で、野口武彦の「イロニー」による読解を批判的に継承した読解を展開する[8]。柴田は『愛の渇き』では、「外界」が語り手と悦子とで二重化されていることを指摘した上で、自由間接話法によって語り手が悦子に干渉することで悦子の夢想的な「内面」世界が崩壊したことを論じる。

この二重の「イロニー」による『愛の渇き』の読解は納

得できる部分も多いが、批評理論を援用した柴田の分析は語り手と三島の混同が見られる。また文体をめぐる統計的な分析が行われていないために、読解の可能性に留まっているというのが実状であろう。

福田耕介は比較文学的な視点から、『愛の渇き』の「反テレエズ・デケイルウ的」主題の読解を試みている。

テレーズが既成の秩序に反抗して「家族」の外に「幸福」を模索するのに対し、悦子は「幸福」を自称することのできる秩序を「家族」の中に自ら構築しようとするのである。（略）二人の持つ破壊の力も、当然、反対の方向に働く。テレーズの破壊力が自分の依拠しているベルナールという秩序に向かうとするならば、悦子の破壊力は、最後まで彼女の秩序に収まり切らない三郎へと向かうのだ。(9)

福田は続けて「悦子の到達した「神なき人間の幸福」は、「夫なき母親の幸福」と言いかえても差し支えないものである。彼女は、家族の父親の位置を占拠し、神もなく夫もなく、彼女を引き裂くどんな葛藤からも遠くにあって、幸福なのである。」と、悦子の空虚で観念的な「秩序」の王国のありようを説明する。福田は悦子が夫との死別後、舅の〈家〉で女王的な立場を獲得し、〈家〉のなかでの抑圧的な生活を「幸福」と言い張っていく姿勢こそが、「反テレエズ・デケイルウ的」であるとする。確かに〈家〉の「秩序」に従おうとする悦子の姿勢は「反テレエズ・デケイルウ的」とも読めるが、作品間の登場人物たちを比較する読解にはやや無理がある。しかもなぜ〈家〉にいることが悦子の「秩序」であり、「幸福」であるのかということの説明には説得力が欠ける。

本稿は、悦子の造形を中心に三点にわけて論じていくことにしたい。一点目はこれまで調査・研究されてこなかった三島由紀夫『愛の渇き』の原稿調査を通じて、悦子の性格等の設定を探る。次に『愛の渇き』のテクスト内には、同時代の「戦争未亡人」をめぐる言葉が散見される。二点目は同時代の「戦争未亡人」問題や作品との比較を行い、悦子の「未亡人」としての立場を考察する。さらに悦子の造形をめぐって、三島は悦子の性格付けにフロイトのヒステリーを用いたと述べているが、実はフロイトの別の著作を使用して悦子を描いているようだ。三点目は三島のフロイト受容を通して悦子の性格と作品のテーマを再考したい。この三つの分析をとおして『愛の渇き』の生成とテー

マを明らかにする。

二　原稿調査から見える悦子像

現在、三島由紀夫『愛の渇き』の原稿は、山梨県山中湖村文学の森・三島由紀夫文学館が所蔵している。今回、三島由紀夫文学館の許可を得て、『愛の渇き』の原稿をカラー複写した資料を調査した。複写原稿であるため文字の修正箇所、特にインクの塗りつぶした箇所などを検討することが厳しく、生の原稿と較べると得られる情報は制限されてしまう。それでも『愛の渇き』の複写原稿から得られる情報は、多岐に亘る。本稿では原稿の基礎的な情報を除き、立論に関わる悦子のキャラクター生成に関わる部分を中心に紹介をしたい。

原稿は二十字二十行の四百字詰原稿用紙で、サイズは複写原稿のため正確には分からないが、既成品の原稿で中扉用の用紙以外は全て用紙のノドに「B4」の表記がある。原稿には三島自身の手によるペン書きでノンブルが1～352と三島自身の手によって付されているが、ノンブル172と173のあいだにノンブル未記入の原稿用紙が一枚あり、三島がノンブルを振り忘れたと見られる。[10] その他に罫線なしの中扉タイトルの用紙が一枚あり、原稿の合計は三百五十四枚である。また中扉用の用紙の裏にエピグラフが記されている。

原稿と各章との対応は、次のとおりである。

第一章（ノンブル1～40）、**第二章**（ノンブル41～115）、**第三章**（ノンブル116～203＊ノンブル未記入原稿一枚を含む）、**第四章**（ノンブル204～284）、**第五章**（ノンブル285～352）

第一章のみ「コクヨ製」原稿で、第二章以降の原稿には会社名等は刻印されていない。原稿には三島自身が手で記したノンブル以外に、中扉から原稿最終頁にかけて1～354とゴム印でノンブルが押されている。さらに編集者による活字ポイントの指示や、頁の切り替え指示が書き込まれている。初刊本『愛の渇き』のポイントサイズおよび頁数と一致することから、三島由紀夫文学館所蔵「『愛の渇き』の原稿」は決定稿であると確定してよい。

これまで三島の他作品の清書原稿を確認した範囲ではあるが、三島の清書原稿は草稿や創作ノートの荒い筆跡と異なり、楷書体で書かれ、文字の崩しや省略が極端に少ない。

編集者のチェックや印刷作業への配慮もあるだろうが、何よりも人に原稿が作品として見られるという意識があったのではないか。さらに「三島由紀夫の原稿にはほとんど直しがない」[11]という伝説は有元伸子らの指摘どおり伝説でしかなく、作品の統一性を図るために原稿の直しを行っている。それでも三島の清書原稿は「見せ消ち」が少ない。三島は清書原稿で文章に変更を加えた場合、文字を完全に塗りつぶしていることが多いのも特徴である。出版社に渡した原稿は完成した作品だという、三島の強い自負心と美意識が見られる。これらは原稿調査を行わねば分からない、興味深い三島の創作態度である。しかし一方で三島の決定稿は活字化された作品とあまり差異がないために、原稿研究が進まなかったのも事実であろう。

しかし『愛の渇き』はノンブル振り忘れだけでなく、原稿の乱れが見られる箇所がある。それは作品第一章から第二章にあたる、決定稿原稿ノンブル1から115の部分である。当該箇所は文字のかたちの乱れが見られるだけでなく、同一箇所を繰りかえし修正した痕跡も見られる。今回の調査でその修正箇所の殆どは悦子に関する描写であることが分かった。その中で気になった二つの場面について見ていきたい。

まず一つ目は悦子が阪急百貨店で買い物を終え、岡町の駅から杉本家へ帰る途中に府営住宅を瞥見する比較的冒頭の場面である。決定稿では第一章、ノンブル8から9にあたる。

府営住宅の家群は灯をともしてゐた。夥しい数の、同じ形の、同じ小さゝの、同じ生活の、同じ貧しさの、殺風景なこの部落は、〈そこをとほる道が近道だからといふばかりでなく、彼女にとつて何ほどか親しいものでもあつた〉そこを通る道が近道であるにもかかはらず、いつも悦子によつて避けられた。あからさまに覗かれるそれらの室内、安物の茶箪笥、卓袱台、ラヂオ、めりんすの座蒲団、時には隅々まで目に映る貧しい食事、その夥しい湯気、どれ一つとして彼女を怒らせないものはない。およそ幸福に対する想像力しか発達してゐない彼女の心は、それらに貧しさを見ず、幸福だけを瞥見した。（※〈　〉内は原稿の「見せ消ち」を示す。傍線引用者。以下同。）

『愛の渇き』では舞台の周辺でもある豊中市が戦後に設営した府営住宅が、戦前から居を構える杉本家と対比的に

描かれる。この場面では戦後の貧しいながらも生活感のある府営住宅の一室の風景が切り取られるとともに、悦子はそれら戦後の新たな「生活」に対する嫌悪感が示される。そのうえで語り手は「生活」から「幸福」だけを抽出しようとする、悦子の特異な姿を浮かび上がらせる。この場面で注目したいのは、『愛の渇き』決定稿の「見せ消ち」である。修正以前の文章では、悦子にとって府営住宅は避けられる対象ではなく「親しいものでもあつた」とされる。修正後の府営住宅の生活への嫌悪とは反対の表現で、悦子の性格を統一させるために改めたと見られるが、ここに三島の言う「反テレエズ・デケイルゥ的」とは何かを考える鍵がある。

三島が参照した杉捷夫訳『テレーズ・デケイルゥ』で確認してみたい。テレーズは地方地主で閉鎖的な夫・ベルナールの家から脱出し、民衆の生活を味わうことを夢見ている。例えば第一章でテレーズは「パン焼き場の匂いと霧の匂いは、テレーズにとつて、もはや、小さな町の夕方の匂いというだけのものではなかつた。ついに返してもらえた生活の匂いを、テレーズは見つけた[22]」と、家の外に出て人々の「生活」の雰囲気に浸ることに歓びを感じている。テレーズのベルナールの実家への嫌悪と大衆的な生活への愛着は、悦子の性格と正反対に見える。だが悦子の性格は果たしてテレーズの性格を反転させたものなのだろうか。

例えば、悦子は三郎への靴下を買い終えたあと、大阪の街中へ飛び出そうと考えていた。つまり悦子は大阪の街や群衆への恐怖・嫌悪感とともに、その空間に身を投げ出したいという二律背反の感情を持っているのである。悦子の性格が単純に「反テレエズ・デケイルゥ的」と言えないのはそのためである。しかしこうした悦子の性格設定はテレーズを土台に築き上げたことは間違いなかろう。ただ、悦子の二律背反の感情が原稿執筆段階の三島にあっても、悦子像を明確に結ぶことの困難さの要因を作っていたようだ。

それは二つ目の注目したい場面にも見られる。

多分、悦子は、〈A食欲を失つた患者□□□□□B結核患C欲しないものへ進んで赴く奇体な情熱のとりこになつてゐた。D□酒を欲しない男が酩酊水に落ちた人が心ならずも飲むE■水のやうに、自然の法則に従つて飲□□□〉F溺れる人が心ならずも飲む海水のやうに、自然の法則にしたがつてそれを飲んだにすぎぬのであらう。

（※□は原稿の空白一字分を示す。■は一字不明を示す。）

この場面は原稿ノンブル102の箇所で作品第二章に当たり、悦子の杉本家に訪れた理由が悦子の消極的な選択であったことを説明したものである。三島自身による複数回に亘る書き直しは、悦子の状況を説明することへの苦戦を物語っていよう。推敲の過程を整理すると、AからFの順になる。

A　多分、悦子は、〈食欲を失つた患者〉
B　多分、悦子は、〈結核患〉
C　多分、悦子は、〈欲しないものへ進んで赴く奇体な情熱のとりこになつてゐた。〉
D　多分、悦子は、〈酒を欲しない男が酩酊〉
E　多分、悦子は、〈水に落ちた人が心ならずも飲む■水のやうに、自然の法則に従つて飲〉
F　多分、悦子は、溺れる人が心ならずも飲む海水のやうに、自然の法則にしたがつてそれを飲んだにすぎぬのであらう。

三島は都合五度の書き直しのなかで、悦子が寡婦として杉本家に来た理由の比喩的表現を繰りかえし推敲している。まずはA、B、Cの表現について見ていきたい。A・Bの表現では悦子自身を病気の患者のように喩えている。しかしこれでは悦子自身が病的な存在として、杉本家に引き取られたかのようにも読めてしまう。Cの表現に改めた理由はむしろ悦子が杉本家の人々を夫・良輔の病と同列に捉え、熱狂的な献身の対象が杉本家へ移ったことを示そうとしたためだと考えられる。少し話は逸れるが三島は自作解説で悦子をヒステリーと結び付けながらも、作品内での悦子の描写には極力病気の比喩を用いていない。だとすると『愛の渇き』執筆時の三島は読者に悦子の精神の動きを追わせ、悦子を精神的な病と受け取るかどうかも読者に委ねようとしていたと考えられる。むしろ作品発表後の三島の発言が悦子像を固定してしまっているとも言えよう。

しかし三島はCの表現でも納得しなかったようだ。次にDからFへ表現を改めていく過程を考えてみたい。Dの段階では三島は飲酒による「酩酊」を喩えにしていたが、EそしてFでは水・海水で溺れたために水を飲んでしまったという表現に改めている。Dは主体が男性に変わってしまっている上に、E・Fに較べて苦しみが分かりづらい。一方でE・Fの表現では悦子が杉本家へ来た理由よりも、悦子が弥吉の慰み者になることの苦しみを受け入れること

を表現の中心に据えている。つまり悦子を「溺れる人」と喩えることで、逃れられない苦しみを受動的かつ必然的なものとして描くことができたと言える。さらにEからFで「水」から「海水」へと改めたのは、悦子の苦しみをより耐えづらいものにするためと言えよう。一見するとFのような徹底的な受動的な悦子の姿勢こそが、「反テレエズ・デケイルウ的」な要素と捉えられなくもない。しかし小説ではこのFの文章の後に「何も希まないといふことは、選択の権利を失ふことだ。さう言つた手前、飲み干さねばならぬ。海水であらうと……」と、語り手による自由間接話法的な語りによって悦子が耐えきれないはずの苦しみを受け入れようとする決意が示される。つまり悦子の受動的な性格は本来的な性質であると言うよりも、悦子の絶望からの帰結だと言うことになり、その絶望に殉ずるかのように苦しみを受け入れているのである。だとすると悦子は〈家〉に従っているのではなく、あくまでも自身の感情に従ってゆるやかな自己破滅に向かっていると言える。そして悦子の「反テレエズ・デケイルウ的」要素は悦子自身の絶望感から弥吉に従い、自己破滅に向かっていく姿勢にこそ見るべきであろう。

ここまで『愛の渇き』の決定稿の調査から悦子像の生成について見てきたが、次章では戦後の「未亡人」に関する問題系を確認し、「未亡人」としての悦子の立ち位置を確認したい。

三　「未亡人」としての悦子

まずは「未亡人」としての悦子の、小説の語り手による評価を確認したい。語り手は杉本悦子が夫の良輔を腸チフスで失い、夫の実家に入った理由を次のように推測する。

良人を失つて一年とたたない女が、何だつて良人の父親に身を委す気になつたのであらう。まだ年とても若く、再婚も十分考へられるあの人が、何だつてわれから自分の後半生を葬るやうな挙に出たのであらう。あんな六十の坂をこえた老人に、何がよくつて身を委せる気になつたのだらう。身寄りのない女だといふが、このごろ流行の、「喰はんがために」やつたことだらうか？　（第一章）

この場面で語り手は、悦子が杉本家に入り、夫の父に夜な夜な愛撫を受けるようになったことを、繰りかえし疑問

形で読者に投げかけている。つまり語り手は読者に対して、悦子が杉本家に入ったことへ興味を集中させ、その理由を考えさせようとしているのである。そして「このごろ流行の」ということで、小説の外部である戦後の同時代空間へと接続させているのである。ここからは少し迂回になるが、戦後の「未亡人」問題を見ていくことにしたい。

昭和二十三年三月の雑誌「婦人朝日」の記事によると、昭和二十二年の統計では「一般寡婦一、三一七、四八五名」で、それとは別に計上されている「戦争未亡人」は「五六六、四〇五名」にのぼったという[13]。数え方によって数値の変動はあろうが、戦後二、三年経った段階で一八八万人以上の「未亡人」がいたことになる。昭和二十三年の日本の総人口がおよそ八〇〇〇万人だったことを考えると、割合は二・四%程度になる。戦後空間にはかなりの割合で「未亡人」がいたことになる。さらに同記事では「一体未亡人に対しては、どんな救援の手がさしのばされているのか——と厚生省を訪れてみて驚いた。どこにもそんな仕事をしている課がない」と、戦争からの復興のなかで、「未亡人」たちへの対策が取られていないことを批判している。

そもそも昭和二十一年にはGHQによって軍人遺族に支払われる恩給が停止されたため、「戦争未亡人」たちは困窮していた[14]。また「戦争未亡人」の定義では漏れてしまう、戦災や戦時下・戦後の衛生環境の問題等で夫を亡くした「未亡人」たちも多数にのぼり、戦後の社会問題になっていたことが窺える。

また他の記事では「吾が国未亡人対策は余りに不備であり、「保護世帯以外の未亡人たちと雖も同じように住宅難に陥つて」いたことが語られる。しかも「未亡人達は住居の不安定なる場合は非常に自主性を喪失して恐ろしい破目に陥つてゆく[15]」と言う。戦後復興のさなかの住宅難は、必ずしも「未亡人」だけがその問題に当て嵌まるわけではないが、金銭だけでなく住環境の不安定さが女性の社会的選択を狭めているという議論も浮上する。

一見するとこれらの記事は政府に対する対策の強化や女性の社会進出を促すかのような発言に見えるが、必ずしもそうとは言えない。それはこれらの議論が総じて、解決策として「再婚」を促すことに落ち着くからである。

例えば「新しい教育と文化」という教育系の雑誌で「婦人は解放されたか?」という議題で座談会が開かれた。その座談会でも「未亡人」の問題が取り上げられている。日

教組の高田なほ子婦人部長は「あの人たちの再婚権と言うか、生存権というものは、やはり認めてやらなければいけない」と、「未亡人」の生存＝再婚という枠組みのなかで語り、「未亡人」の再婚を「新しい結婚と同じ条件で、やはり私たちは見ていきたいものです。また女の人も再婚するということで、自分を卑下する必要はない」[16]と言う。この座談会では女性の社会進出や〈家〉に縛られない恋愛結婚が議論されているなかで、「未亡人」の話題はややトーンの低いものになっている。戦後社会で「未亡人」の立場の低さを如実に示す発言と言えよう。

ただ、戦後の家制度批判による「恋愛」の推奨は「未亡人」の「再婚」にも及ぶ。言説としては「経済的原因のための一時的避難所となり勝ちな「再婚」を、愛情を中心とする新しき人生の「スタート」となすべく指導すべきである」[17]というように、人生の再出発には恋愛が重要だと語られ、文壇でも「未亡人」を題材とした評論や小説が作られた。

例えば、河盛好蔵は「若き未亡人に寄せる言葉」で戦災「未亡人」に対して「あなた方は戦の最も大きな犠牲でした」と言い、「自分を愛してくれる人と結婚することは決して貞操にもとることではありません」[18]と「未亡人」たちに旧来の倫理観を払拭するように促す。

豊島与志雄も「未亡人」という短編小説では、語り手が「森山未亡人千賀子さん」に呼びかけるかたちで小説が進行するのだが、語り手は千賀子に対して「本当の愛情」[19]を持ったことがあったかと問いかけ、体裁を選んだ千賀子を批判するかたちで終える。このように戦後の言説空間は旧来の家制度や社会的体裁よりも「恋愛」を重視しようとする、一種の恋愛至上主義的空間であったと言える。

しかし一方で「恋愛」について「現代青年男女の交際がやゝもすると自由奔放にはしり多くの弊害と悲劇を生む」とし、「純潔運動一助として」[20]展覧会が催された。さらに「一夫一婦の結婚制度こそ、文化の高い国の男女の愛情のあり方です」[21]という、「正しい」「恋愛」と「結婚」のあり方を提示し、「恋愛」重視の風潮に再考を促す記事も散見される。例えば「未亡人」窮乏の問題を提示した「婦人朝日」も、同号の巻頭で医師・金子準二によって「未亡人」の「恋愛」や「性」に対して否定的な見解が示され、「未亡人」の「性愛」が「社会道徳の低下」を呼び、社会的「犯罪」の下地になることが語られる。「未亡人」は戦後の

「アプレ・ゲール」と呼ばれた若者と同様に、犯罪予備軍的な扱いを受ける。しかもその解決策の無さに「未亡人だけの〝新しい村〟」に閉じ込めてしまうか、「むかしのインドのように未亡人をみんな焼き殺してしまうわけにも行かぬ」[22]という発言まで飛び出す。現在の我々から見れば決して許されることのない差別的発言であるが、これが当時の「未亡人」に対する認識であったと言える。『愛の渇き』の悦子が杉村家にやって来たことを杉本家の人々が「揣摩憶測」することには、こうした戦後の背景があった。

このように戦後の「未亡人」たちの「再婚」問題は社会経済の問題であったとともに、新旧の家庭観・倫理観が対立する空間であった。ここからは『愛の渇き』の悦子と比較してみたい。語り手は悦子が杉本家にやってきた際の心情について、次のように説明する。

悦子が弥吉の招きをうけて米殿村へ来る決心をしたとき、すでにして彼女はこのやうな夜の到来を予期してゐた。むしろ彼女はこれを希つてゐた。良人の死と共に、悦子は印度の寡婦のやうに、殉死をねがつた。彼女の空想した殉死は奇怪なものであつた。良人の死に殉ずるのではなくて、良人への嫉妬に殉ずる殉死であつた。

（第二章）

悦子は先程の金子の発言を実行するかのように、自ら米殿村の杉本家に入り、夜な夜な舅の愛撫を受けながら「印度の寡婦のやう」な「殉死」を願う。「戦国時代の名将の血を引く」悦子は、「立身出世」や「教養主義」を体現する中産階級的な弥吉や謙輔を蔑みながらも、自身の欲望を抑圧して〈家〉に従うことを美徳とする士族的価値観を体現した存在と言えよう。しかし同時に語り手は悦子の「殉死」の望みが、実は浮気な夫・良輔への「嫉妬」という、極めて悦子の個人的な感情によることを明かす。つまり『愛の渇き』は戦後社会の「未亡人」問題を水平軸に、「文化資本」（ブルデュー）的な歴史的階級性を垂直軸として、悦子の立場を立体化させる。悦子はこの二つの側面に身体的に縛られつつも、いずれにも与しない悦子の内面的事情が描かれているのである。まさしく悦子の「嫉妬」の感情をめぐる「愛の渇き」が描れた小説であると言える。しかしそのような「嫉妬」から絶望的な「殉死」を望み、杉本家に来た悦子が、なぜ自らを「幸福」だと言い張るのだろうか。次章では三島由紀夫のフロイト受容から、悦子の言う「幸福」の意味と三郎殺害の理由を考えていきたい。

四　フロイト理論と悦子

三島由紀夫は悦子を造形するにあたって、「フロイトの「ヒステリィ研究」」を参考にしたことを明らかにしている。確かに悦子が火で手を炙る自傷行為や三郎を殺害することを、悦子の精神的葛藤から来る、「ヒステリー」による「防衛機制」と読解することも可能であろう。しかし実際にフロイトの「ヒステリー」に関する理論研究・症例研究の両方を確認したが、悦子と共通する要素を見つけることの方が難しい。そのため『愛の渇き』とフロイトの精神分析理論との比較研究は殆ど進まなかった。三島はフロイトの別の書物から悦子の造形を行っていると考えられる要素が見つかったので検討してみたい。

論者はこれまで三島由紀夫のニーチェ受容と戦後の文学実践について考察してきた[23]が、戦後の三島文学にとってもう一つの大きな思想的影響としてフロイトを中心とした「美学」の受容があると考えている。フロイトは精神分析研究で有名であるが、同時に自身の精神分析研究を交えた文明批評を行っている。第一次大戦後のフロイトの文明批評はダーウィン、カント、ニーチェなど諸科学の書物を受容しながら、「人間」と「動物」との境界線策定を試みている[24]。特にフロイトは「文化の不安」という評論のなかで、「人間」の性的抑圧の「昇華」・「代償」行為としてさまざまな文化・芸術・宗教が生成される過程と、「昇華」行為への不満・葛藤が「攻撃衝動」を呼び起こすことが語られる。本書では「人間」の抑圧的な「文化」の象徴としての「火」「幸福」という『愛の渇き』と共通する言葉が見られ、論者は三島が悦子の性格を形作るにあたって参照した可能性が高いと考えている。『愛の渇き』発表以前でフロイト「文化の不安」がまとまったかたちで翻訳されたものは、管見の限りではあるが菊池榮一、石中象寺訳の『戦争と死の精神分析』（昭7・12・28、アルス）に収録されたもののみであった。この書物は三島由紀夫の蔵書にも確認できる[25]。

まずはフロイトの主張を確認しながら考察を進めていきたい。フロイトは「人間」の「最初の文化的行動は種々なる道具の使用、火の統御、住居の建築であつた」という。特に「火の統御」についてフロイトは「火に当面した時、小便してこれを消すことに、火に対する小児的快感」を得

ていたが、その快感を抑圧したことによって「家庭」が作られたという。「火」の使用が人間の文化の始原として語られることはよくあることだが、フロイトは「火」と「性」を結びつけたところがその特徴と言える。フロイトは次のように語る。

> 彼が彼自身の性的興奮の火を抑制したことによつて、彼は火の自然力を統御（ツエーメン）した。この大きな文化的征服は、かくて衝動断念の報酬であつた。更に、人は家庭の爐に捕へられた火の番人に妻を頼んだらしい、何となれば女の解剖的構造は、このやうな快感誘惑に逆はぬやうに出来てゐるから。(26)

フロイトは女性を夫から与えられた「火」によって性的欲求を断念させることで、「家庭」の「妻」として役割を担うとする。その一方で女性は本質的に性的欲求に弱い存在であるとも語る。つまりフロイトは「妻」とは女性としての性的欲求を常に抱きながらも、仮構的に性的去勢をされた存在と規定しているのである。

現在の観点からすると男性主権的で女性蔑視の発言だが、このフロイトの主張の角度を三島は意図的に用い、悦子の「嫉妬」をめぐる問題を描いたと考えられる。悦子は美代が三郎の子を妊娠したことが発覚した後、美代への「嫉妬」の苦しみに耐えようとしていたところ、無意識的に焚火の中に自身の手を入れてしまう。悦子が三郎に意識させるためにフランス製のウビガンの香水を付けていたことを考えても、悦子は三郎を性的な「肉体」として捉えていたと言えよう。悦子が飛び込んだ「火」は、性的抑圧としての「火」だったのである。また悦子の良輔への「嫉妬」もまた、性的な問題であったようだ。小説内で殆ど悦子と良輔との「家庭」生活の内実が描かれていないが、美代妊娠発覚後の第四章冒頭で二人の性的な関係性が語られる。

> 彼との生活は、秘密の部屋でひらかれるいかがはしい学校、そのはてもしれない課業に変貌した。良輔は悦子を愛するといふよりは教育した。教育するといふよりは仕込んだのである。あだかも香具師が因果娘にさまざまな芸当を仕込むやうに。

このように悦子の良輔への「愛」の内実は性的な主従関係であったことが示される。良輔は悦子に対し性的調教を加えたが、良輔は浮気を繰り返す。悦子は「嫉妬を禁断しさえすれば、愛さなくてすむ」と、「愛」と「嫉妬」の順序を逆転させてまで「嫉妬」を乗り越えようとするが、そ

の試みは失敗に終わっている。フロイトの説に従って読み解くと、悦子は良輔への性的不満から来る「嫉妬」を抑圧したがために「妻」なり、その夫への「嫉妬に殉ずる」ために杉本家へ来たと言える。しかし訪れた先の杉本家で三郎を「愛」してしまうことで、悦子は再び自身の欲求と抑圧の対立の渦のなかに引きずり込まれることになる。

次に悦子の言う「幸福」について考えてみたい。悦子の主張する「幸福」という言葉も、フロイト「文化の不安」のなかで語られている。フロイトは「人間」が「動物」的な性的欲求を制限してしまったため、「人間」はシステム的に「幸福」と感じること自体が制限されてしまっていると語り、「幸福」は「鬱積した諸欲求の突然の満足」でしかなく「性質上ただ挿話的現象としてのみ可能」[27]な感覚であるとする。絶えず自身を「幸福」であると主張する悦子とフロイトの「幸福」とは繋がらないように見える。だが悦子の言う「幸福」とは、「海水」を飲み干してしまうという不可能な「苦しみ」に耐え抜いた果てにある、一時的な満足感としての「幸福」なのではないか。しかも悦子はその論理的順序を逆転させる。つまり「嫉妬を禁断しさえすれば、愛さなくてすむ」と同様に、悦子は「幸福」だと主張すれば「苦しみ」は耐え抜けると考えたのである。

さらに悦子の「幸福」への固執は三郎の殺害とも関係する。悦子は体を求めてきた三郎に「溢れるやうな愛しさ」を感じながらも、抵抗し助けを呼んでしまう。驚いた三郎は悦子から逃れるが、叫び声に駆けつけた弥吉の持っていた鍬で、悦子は三郎を打ち殺してしまう。その際に弥吉は「何故殺した」と悦子を責めるが、悦子は「あなたが殺さなかつたから」と強く言い返す。しかも三郎を殺した理由について悦子は「あたくしを苦しめたからですわ」と言い、これまで耐えてきた「苦しみ」を台無しにしてしまったことを明かす。

フロイトは「文化」の生成をめぐる議論のなかで、性的抑圧とともに「攻撃衝動」の抑圧についても語っている。特にフロイトは「文化のプログラムに矛盾するものは、人間の生れながらの攻撃衝動」[28]であるとし、「文化」を破壊してしまう原始的な「攻撃衝動」を抑えることが不可能にも近い行為だと語る。しかもフロイトは「攻撃衝動」の「拘束を識らな」い方が「幸福」を感じることができるとし、「原始家族に於ては、家長のみがその衝動自由を享楽し」[29]得たと語る。このようにフロイトは性の抑圧と解放の

対立による「文化」論や「家庭」論を築きながら、「幸福」という快感性においては原始的な「攻撃衝動」を容認する。悦子は三郎に対して性的葛藤を抱きながらも、「幸福」を第一義としていたために、フロイトの言う「攻撃衝動」を呼び起こしてしまったと言える。

第一章で紹介した福田耕介は「悦子は「幸福」を自称することのできる秩序を「家族」の中に自ら構築」するために邪魔な三郎を殺害したというが、そうではなく、悦子は空虚で個人的な「幸福」という概念に籠城するためだけに弥吉に成り代わり三郎を殺害したというのが正解だろう。悦子自身も言うように、悦子の「幸福」は「根拠がない」のである。悦子は「幸福」に対して論理的な逆接を用いているが、同時に悦子自身が「幸福」の不在を示す逆説的な存在なのである。

悦子は「嫉妬」や「苦しみ」を超えて「幸福」にたどり着くべきところを、「幸福」を出立点であり目的地としたために自身の空虚な「幸福」の論理に籠城してしまったのである。恐らく悦子は三郎殺害後も「幸福」に固執し、「家長」の尊厳を失ってしまった弥吉とともに、「未亡人」として杉本家に居座り続けるのであろう。

注

(1) 花田清輝「三島由紀夫「愛の渇き」―新潮社刊―」(「人間」5―9、昭25・9)

(2) 青野季吉「伝統と実験」(「読売新聞」朝刊第四面、昭25・12・25)

(3) 吉田健一「解説」(三島由紀夫『愛の渇き』昭63・8・15、81刷改版、新潮文庫)

(4) 中村光夫、本多秋五、三島由紀夫「創作合評41回」(「群像」5―10、昭25・10)

(5) 三島由紀夫「あとがき」(『三島由紀夫作品集』第二巻、昭28・8・31、新潮社)

(6) 三島由紀夫「あとがき」に同じ。

(7) 柴田勝二「距離の崩壊――『愛の渇き』と『青の時代』の分裂」(『三島由紀夫――魅せられる精神』平13・11・15、おうふう)

(8) 野口武彦『三島由紀夫の世界』昭43・12・10、講談社

(9) 福田耕介「三島由紀夫『愛の渇き』におけるフランソワ・モーリヤック――夫なき「母親」の幸福について」(「白百合女子大学研究紀要」40、平16・12)

(10) 三島自身によるノンブル未記入の『愛の渇き』原稿は『決定版由紀夫全集』第二巻では、一〇八頁五行目の「虫の音は」から同頁九行目「ときどき途絶」までが、その箇所に

あたる。ノンブル173につながる文章の途中であることから、後に追加した原稿とは考えづらい。三島のノンブル振り忘れだろう。

（11）有元伸子、中元さおり、大西永昭「三島由紀夫『金閣寺』の原稿研究―柏木、老子、金閣―」（「広島大学大学院文学研究科論集」68、平20・12）

（12）フランソワ・モーリアック「テレーズ・デケイルゥ」（杉捷夫訳『テレーズ・デケイルゥ』所収、昭24・10、細川書店）

（13）K「貧弱な未亡人の保護施設」（「婦人朝日」3―3、昭23・3）

（14）赤澤史朗「1950年代の軍人恩給問題(1)」（「立命館法学」333、334合併号、平成22・5、6）

（15）福永アキ「終戦後に於ける未亡人問題――特に未亡人対策試案――」（「社会事業」32―1、2合併号、昭24・4）

（16）神近市子、齋藤きえ、山川菊栄、小野崎一恵、榊多喜子、高田なほ子「座談会　婦人は解放されたか――日教組婦人部――」（「新らしい教育と文化」2―6、昭23・6）

（17）注（15）に同じ。

（18）河盛好蔵「若き未亡人に寄せる言葉」（「婦人文庫」1―5、昭21・9）

（19）豊島与志雄「未亡人」（「風刺文学」1―1、昭22・4）

（20）無署名「正しい男女交際と幸福なる結婚生活／展覧会」（「読売新聞」朝刊、第二面、昭25・1・3）

（21）大浜英子「妻子ある男の子／生んだ親友は幸福だというが……」（「読売新聞」夕刊、第二面、昭25・1・16）

（22）「現在の未亡人の特徴――性愛と苦難の生活――東京都衛生局医博・金子準二氏にきく」（「婦人朝日」3―3、昭23・3）

（23）拙稿「三島由紀夫「親切な機械」の生成――三島由紀夫とニーチェ哲学」（「日本近代文学」84、平23・5）、拙稿「三島由紀夫「青の時代」の射程――道徳体系批判としての小説」（「昭和文学」64、平24・3）

（24）ヴァンフリード・メニングハウス『吐き気――ある強烈な感覚の理論と歴史』（竹峰義和、知野ゆり、由比俊行訳、平22・8・25、法政大学出版局）『美の約束』（伊藤秀一訳、平25・9・20、現代思潮新社）に詳しい。

（25）島崎博、三島瑤子編『定本 三島由紀夫書誌』（昭47・1・25、薔薇十字社）

（26）フロイト『戦争と死の精神分析』「文化の不安」：火の統御と身体器官としての道具（五二頁、菊池栄一、石中象治訳、昭7・12・28、アルス）

（27）フロイト『戦争と死の精神分析』「文化の不安」：苦悩の根源、二七頁

(28) フロイト『戦争と死の精神分析』「文化の不安」：エロスと死の衝動との争闘、一〇五頁

(29) フロイト『戦争と死の精神分析』「文化の不安」：文化は攻撃衝動の満足に犠牲を要求する、九三～九四頁

（高知県立大学講師）

【付記】三島由紀夫『愛の渇き』の原行調査にあたって、所蔵先である山中湖文学の森・三島由紀夫文学館には便宜を図って頂いた。ここに謝意を示す。